九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「過渡時代論」に見る梁啓超の”過渡”観

若杉，邦子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9684

出版情報：中国文学論集. 22, pp.49-66, 1993-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

「過渡時代論」に見る梁啓超の〝過渡〟観

若杉邦子

一

清末、中国が自国の無力を悟り、海外に学ぶ必要を痛切に感じるようになったのは、日清戦争に敗北し、大国の威信が失墜した後のことであった。洋務運動の後を承けて台頭して来た、康有為（1858～1927）・梁啓超（1873～1929）らの変法自強運動は、戊戌政変（1898・9・21）の勃発によって一旦挫折を味わう。しかし、変法自強派のメンバーは、その夢を決して諦めようとしなかった。梁啓超の場合は、亡命先の日本（横浜）で変法派の言論機関紙《清議報》を主宰し、文筆活動でもって中国の近代化を達成しようと熱く闘志を燃やした。

ところで、中国の近代化にあたって、梁啓超の考えた学問・教育のやり方とは、彼の論説「日本文を学ぶの益を論ず」[1]に明らかな如く、西洋の文明を日本書から手っ取り早く学びとることに、その第一歩を置くというものであった（彼は和文に対して「中国人にとっては、習得が比較的容易な言語である」との見解を持っていた）。そこで彼は、日本書を相次いで中国語に翻訳して自国に紹介し、更にはその翻訳作業によって得た日本製の新漢語を借用しながら、自分の政論を陸続と発表した。彼の文章が当時の人々に多大なる影響を与えたことは、周知の事実である。

新漢語（西洋文明の移入によって新たに生じた漢語）には、大きく分けると「新造漢語」（当時全く新しく創られた漢語）と、中国の文献に典拠を持つ「伝来漢語」との二種類がある。この二種類の新漢語は、ともに、中国人が造ったものと、日本人が造ったものとに分類し得るので、それらを分別して次に示すと、

(a)　日本人の創った「新造漢語」　(b)　中国人の創った「新造漢語」
(c)　日本人の工夫による「伝来漢語」　(d)　中国人の工夫による「伝来漢語」

右の四種類の新漢語が存在することになる。

意外にも、清末中国に於いては(b)と(d)の中国製新漢語よりも(a)と(c)の日本製新漢語の方が盛んに用いられたようである。(a)と(c)の日本製新漢語を中国に持ち込んだ最大の功労者とは、先にも述べた梁啓超であり、「日本語より吸収したものは（日本製新漢語を指す…筆者註）適度に平易であり、かつ中国語にかなった造語法によっていたため、日本経由の風潮とともに優勢な普及を示」[2]したのだという。

ここで、明治及び清末の新漢語に関する従来の研究状況について一瞥したい。それらに対する具体的、且つ詳細な研究は、現在に至るまでほとんど為されて来なかった。その結果今日、〝誰によって、いつ造られたか〟詳らかでない新漢語は甚だ多い。例えば、本稿に於いて筆者が考察の対象として採り上げる「過渡」という言葉も、そういった〝出自不詳の新漢語〟の一つである。

我々はごく日常的に「過渡」という言葉を用いるが、曽てこの言葉に特別な注意が払われたことはなく、検討された例もなかったように思う。大槻文彦博士の『新訂大言海』はその語源を「英語、Transitionノ訳語」と説くが、[3]根拠を明確に示していない。

新漢語「過渡」の最初の現れが、一体何処に見られるのか、という問いに対しては、筆者にも答えるだけの充分な用意がない。[4]新漢語「過渡」の濫觴を突き止めることは、今後の課題として、一旦置きたい。本稿のねらいは、新漢語の伝達者とも言うべき梁啓超が、その変法自強運動と相俟って、どのような意識の下に新漢語「過渡」を中国に持ち込んだのか、彼の論文「過渡時代論」の分析を通じて明らかにしていくことにある。

二

今日の日本で、我々はごく日常的に「過渡期」「過渡的」といった言葉を用いるが、ここで今一度「過渡」とい

う言葉の、日本に於ける今日的な意味を辞書で調べてみると

①移りゆくこと。旧いものから新しいものへ移る途中。「―期」

②漢文修辞法で、上文を承けて下文を起こすのに用いる、筆のつがいになる語。承接。（『広辞苑』第四版　新村出編　岩波書店　一九九一年十一月）

と記されており、我々が一般に使用するのは①の意味合いに於いてであることがあらためて知られる。

現在の中国に於ける「過渡」の語義も、①に挙げた、日本語に於ける語義と同様である。このことは、例えば、中国でごく一般的に用いられている『現代漢語詞典』（中国社会科学院語言研究所詞典編集室編　商務印書館　一九七八年十二月）が「過渡」という語を「事物由一個階段逐漸発展而転入別一個階段：～時期」と説明していることからも解る。

しかし、日本や中国に於いて、「過渡」という語の持つ意味が、「（〝旧段階〟から〝新段階〟へと）移りゆくこと、また、次の段階に移るその途中」である、と一般に理解されるようになってから、今日に至るまでに経過した時間は、実はわずか百年位に過ぎない。少なくとも、中国に於いて「過渡」という言葉が、今日的な意味合いを帯びて盛んに使われ始めたのは、二十世紀に入った一九〇一年以降のことだと確信するが（一九〇一年とは、日本で言えば明治三十四年、中国で言えば光緒二十八年にあたる）、そのことについては梁啓超の「過渡時代論」を紹介する時に改めて述べたい。

新漢語として「過渡」の語が用いられる以前から、中国には「過渡」という言葉が確かに存在していた。しかし従来の「過渡」は、現在我々が用いる①の意味に於いては使用されない言葉であった。

「過渡」という熟語は、文法構造上、次の二通りに解釈されるであろう。

a・｛「過」＝動詞、「渡」＝動詞｝の構造……「経過（よぎる）＋渡河（江河を渡る）」

b・｛「過」＝動詞、「渡」＝名詞｝の構造……「経過（よぎる）＋渡口（わたしば）」

aは二つの動詞を重ねて一つの動詞を形成する型の熟語である。この場合の動詞「過」[5]は「経過」「走過」の「過」であり、動詞「渡」[6]は「渡河」「渡航」の「渡」であるから、この二字熟語は「渡る、（舟で）江河をよぎる」

ことを意味していると考えられる。

一方bは、動詞の後に目的語が来る〝動賓構造〟であるから、「渡」は名詞として解釈されねばならない。よって「渡」の意味する所は「渡し場、津」であり、熟語全体の意味は「渡しをよぎる」ことだと解釈出来る。

上記aとbの違いとは、「渡」を動詞ととって「(水の上を)渡る」という意味を持つ述語の一部であると見做すか、名詞ととって「渡し場」という意味の目的語と見做すか、という点にある。いずれにせよ「渡」は水上交通に関わる漢字であるから、abどちらの解釈をとっても「過渡」とは「(舟で)江河を渡ること」、すなわち水上交通を指す言葉であることに変わりはないようだ。今、具体的に用例を二つ挙げてみると

例1・野市分麾鬧　官船過渡遅　　市場はのろ(くじか)の群がったように喧しく　官船の渡しは遅い
(蘇軾「荆州」十首之其五　『蘇東坡詩集』巻二)

例2・偶扶拄杖登山去　却喚孤舟過渡來　　たまたま杖にすがって山を登っていったり　また孤舟を招いて川を渡って来たりする(陸游「遊山」　『剣南詩稿』巻八十五)

両例とも「過渡」を「江河を渡ること」として用いている。

以上見て来たとおり、「過渡」とは本来「江河を渡ること」を意味する言葉であった。

新漢語「過渡」は、伝来漢語であるから、前に示した新漢語の分類(本稿第一章)に従えば(c)或いは(d)に該当するものと言えよう。

三

次に、梁啓超の「過渡時代論」の内容について紹介したい。

「今日之中國過渡時代之中國也」という書き出しで始まる梁啓超の「過渡時代論」は、光緒二十七年(1901)五月十一日付けの《清議報》第八十三冊に掲載された。先にも少しふれたが、梁啓超が横浜で《清議報》を発刊した目的は、変法自強という自らの政治的主張を宣伝し、故国中国の人民の意識を改革することに在った。従って、

同報上への「過渡時代論」の掲載も、そうした変法自強運動の一環として位置付けられるであろう。筆者の知る限りでは、この「過渡時代論」が、新漢語「過渡」の、最も早い用例を示す資料である。

今、「過渡時代論」の内容に沿って、「過渡時代」とは何かということを簡単に纏めると、

〔(国家が)〝旧〟から〝新〟へと(「過渡者改進之意義也」第六章)向かうにつれて、〝弱〟から〝強〟へと(「多少民族由死而生、由剝而復、由奴而主、由瘦而肥」第二章)進化していく(「人群進化級級相嬗」第一章)(その途中の)時代〕

ということになるであろう。

「過渡時代論」に於ける梁啓超の筆調について言えば、「過渡」という語の定義から筆を起こして、その後〝「過渡」時代とはどんな時代か〟〝現在は「過渡」時代である〟〝「過渡」時代に心得るべきこと〟云々と読者に説いて聞かせている。この梁啓超の筆調を見る限りに於ては、新漢語の「過渡」を創った人物は他でもない梁啓超自身であったのではないかと推測したくなる。とはいうものの、先述の通り、梁啓超は、日本製の新漢語を多く中国に持ち込み、それを定着させることに功績のあった人物であるから、「過渡時代論」中の「過渡」という新漢語にしても、彼が使用する以前に、他の人物によって用いられた言葉であったかもしれないという疑いは消し難い。

しかし、梁啓超の筆調から次のことは確かに分かる。それは、「過渡時代論」が書かれる以前の中国に於いては、新漢語の「過渡」の使用は定着していなかった、それどころか全く見られなかったということだ。全く定着していなかったからこそ、梁啓超は「過渡時代論」中で「過渡」の定義付けという、第一段階から始めたのだと考えられる。従って、中国に於いて新漢語「過渡」は一九〇一年以降定着していったと確信する。「過渡時代論」が、当時中国で絶大な影響力を誇ったジャーナリスト梁啓超の文章であることを考慮すれば、「過渡」という新漢語が、以後、中国で大いに使われるようになったことにも充分に納得がいく。

してみれば、「過渡」という言葉が、或いは梁啓超のオリジナルではなかったとしても、「過渡時代論」の中には梁啓超独自の考えがふんだんに盛り込まれたはずである。以上の理由から「過渡時代論」について検討する価値は充分にあると考える。新漢語「過渡」の日中両国に於ける定着についても、機会を改めて専一に論じたく思う。

ここで、「過渡時代論」を構成する六つの章について、その内容を簡単に紹介しておくことにする。

一「過渡時代之定義」：（「過渡」には〝広〟〝狭〟の二義が有る。〝広〟義の「過渡」は社会の進化全般を指す。〝狭〟義の「過渡」は「進歩」そのものを「停頓」と「過渡（前進）」とに分けた場合の、後者のみを指す。中国は数千年というものずっと「停頓」時代だったが、現在ようやく「過渡」時代を迎えている。）

二「過渡時代之希望」：（「過渡」時代とは希望の湧泉である。何故なら、「進歩」と「過渡」とは切り離せない関係にあり、「過渡」が無ければまた「進歩」もあり得ないからだ。民族が強大になるためにはこの「過渡」時代を経なければならない。）

三「過渡時代之危險」：（「過渡」時代とはまた、恐怖の時代である。「過渡」時代は国民全体の生死の、あるいは国家の存亡の分かれ目であるから、「過渡」時代には目標を正確に見定めて、迅速に「過渡」しなければならない。）

四「各國過渡時代之經驗」：（現在強大な勢力を誇る欧米諸国は、十八、十九世紀にすでに「過渡」時代を経験した国ばかりである。そうした国々の経験に鑑みるに、「過渡」の様相は各国それぞれに個性的であり、一律ではなかったと分かる。だから、「過渡」の発端で挫折を味わった中国にも、挽回の可能性は大いに残されているというわけだ。）

五「過渡時代之中國」：（現在「過渡」中の国は二つある。一つはロシア、一つは我が中国である。ロシアは従来、幾度となく改革を繰り返し、西欧文明を輸入してきた結果、国民の脳に〝世界の公理〟が浸透しているから、近代化を達成する日は間近であろう。一方中国は、十九世紀になって世界情勢が激変してから近代化を開始したので、現在まことに心許ない状況にある。我々が掲げる大目標は・政治上の「過渡」・学問上の「過渡」・理想風俗上の「過渡」を達成することである。）

六「過渡時代之人物與其必要之德性」：（我々はこの「過渡」時代を乗り切るために、英雄の登場を切望する。我々が欲するのは旧時代の英雄でも新時代の英雄でもない、清末現在、即ち「過渡」時代の英雄である。「過渡」時代の英雄は、初期には冒険性、中期には忍耐性、末期には別択性（鑑別し選択する能力）という三つの徳性を、

必ずや備え持たねばならない。今こそ国民の英雄が登場し、国民の代表として活躍すべき時勢である。時勢に造られし英雄よ、速く現れ出よ！）

「過渡時代論」の各章の内容について、以上のように纏めてみた。次に、「過渡」という言葉そのものについて、少し詳しく考察してみたい。

四

ところで、「過渡」という言葉の意味は何故、従来の「江河を渡ること」という意味から、現代我々が用いるような「（旧段階から新段階へと）移りゆくこと、またその途中」という意味へと変化したのだろうか。当章では、この問題を足がかりにして、「過渡」という言葉について考えていくことにする。

「過渡時代論」を詳しく調べると、一文の中に、現代語の「過渡」の定義と、「過渡時代論」中の「過渡」の定義が〝同様〟のものであることをうかがわせる、「新舊兩界線之中心的過渡（第六章）」という言葉と、一例のみではあるが、従来の用例に従った、「江河を渡ること」を意味する「過渡」という言葉とが、同時に存在していることに気付く。従って、「過渡時代論」の内容を検討していく事によって、右の疑問に対する一つの解答が得られると考える。

清末の知識人達は「過渡時代論」というタイトルを目にして、当面どの様な内容を思い浮かべたであろうか。彼らの脳裏に浮かんだであろうイメージを、今、敢えて言葉で表現するとすれば、「大航海時代論」とでも言い表わすのが妥当であろう。

船頭坎坎者　自由之鼓耶　船尾舒舒者　獨立之旗耶　當十八十九兩世紀中
相銜相逐相提携　乘長風衝怒濤　以過渡於新世界者　非遠西各國耶（同論文第四章）
船首でタンタンとなるのは自由の太鼓か　船尾でハタハタと翻るのは独立の旗か

十八十九両世紀　前になったり後になったり互いにその手を取り合って
大風その背に怒濤を衝いて新世界に過渡して来たのは　実に西欧各国だった

《清議報》の読者が、同論文のタイトルを見て、すぐさま思い浮かべたのは、こうした調子で続く文章であったと思われる。当時は「黒船来航（ペリー来日）」に象徴されるが如き「過渡時代」であったから、それも当然と言えよう。過渡時代に書かれた「過渡時代論」という論文は、そのタイトルからして清末の世相を如実に反映する、まさにタイムリーな文章であったのだ。

しかし、読者の予想は大幅に裏切られた。「過渡時代論」に於いては、タイトルも含めて「過渡」という語が全部で五十六回使われているのだが、その五十六回中、従来通り「江河を渡ること」を意味するケースは、右に示したわずか一例のみしか存在しない。では他の五十五例の「過渡」は、「江河を渡る」ことを意味しないで、一体何を意味したのであろうか。

先に、本稿の第三章で、梁啓超の言う「過渡時代」とは、「（国家が）〝旧〟から〝新〟へと向かうにつれて、〝弱〟から〝強〟へと進化していく、その途中の時代」という意味であったことを確認した。そこから判断すれば、同論文中に於て「過渡」の語が意味する所は「〝旧〟から〝新〟へと向かうにつれて、〝弱〟から〝強〟へと進化していく」ことであると考えられる。

このことだけを見た場合には、「過渡時代論」中の「過渡」の意味は、現代語に於ける「過渡」の意味（本稿第二章）に、極めて似ているという印象を受ける（現代語の「過渡」が単に「移りゆく」ことを指すのに対して、「過渡時代論」の「過渡」は「〝弱〟から〝強〟へと進化していく」ことを指しており、両者のニュアンスには確かに違いが見られるのではあるが）。では、現代語の「過渡」と「過渡時代論」中の「過渡」は、ほぼ同質のものであると単純に判断して良いであろうか。

結論から言えば両者を同質のものと見做すことは不可能である。確かに今日、両者は、ほぼ同様の意味内容を持つに至っている。しかし、本来両者の間には次のような〝根本的な差異〟が存在していたのだ。

その〝根本的な差異〟が何であるかは「過渡時代論」中の「過渡」という語が実は、当時の中国に於いてまだ定

着しきっていなかった「進化」という概念を、読者に、より明確に伝えるために、梁啓超が持ち出した〝隠喩〟であったということから、容易に導き出せるであろう。つまり、現代語の「過渡」は、言葉そのものが「旧から新へと移りゆく」ことを意味するが、「過渡時代論」中の「過渡」はそうではなく、「過渡時代論」中の「過渡」とは、その新漢語としての用法がまだ中国に定着していなかったという当時の状況から察するに、「江河を渡るがごとく進化する」という意味に、《清議報》の読者が機転を利かせて解釈した言葉であったはずなのだ。

今述べた通り、梁啓超は「進化」の貌を「過渡（江河を渡ること）」という語でもって喩えようとしたと考えられる。それにしても、なぜ「進化」という言葉に「過渡」という語を組み合せたのであろうか。両者はどう見ても不可思議な取り合せである。

そこで、「進化」と「過渡」がどの様に関連するのか、もう少し詳しく知るために、梁啓超がここで言う「進化」の意味をまず押さえてから、然る後に、何故「過渡（江河を渡ること）」という語が組み合されたのかを考えていこうと思う。

梁啓超の論文「進化論革命者頡徳之學説」[7]「天演學初祖達爾文之學説及其略傳」[8]から、彼の言う「進化」について纒めると、以下のように言える。

「進化とは、生物の種が〝適者生存〟の原則に従って〝劣〟から〝優〟へと変遷を遂げていくことである（ダーウィン説）。この法則は人間界のあらゆることに応用可能な公理であり、人間界の全ての事は自然淘汰によって優者を残し、発展へと向うと考えられる（スペンサー説）」これから推すに、梁啓超は、人間社会のあらゆることは「進化」のルールに従って〝劣〟から〝優〟へと進歩し、発展していくものと考えていたらしい。

梁啓超の言う「進化」を確認したところで、次に「過渡（江河を渡ること）」の持つ意味を「進化」との関連に於いて探ってみたい。

「過渡」とは実際上は、どのような行動であろうか。今、その行為を具体的に想像するに、「過渡」とは即ち「〝此岸〟（こちら岸）から〝彼岸〟（むこう岸）へと渡る」行動を指すと言えるであろう。

「過渡時代論」中に於いても、次のように〝此岸〟〝彼岸〟の語が用いられている。

「其在過渡以前止於此岸、動機未發、其永静性、何時始改所難料也」
「其在過渡以後達於彼岸、躊躇満志、其有餘勇、可賈與否亦難料也」

そして、実はこの「〝此岸〟から〝彼岸〟に渡ること」こそが、「進化」と「過渡」が結びつく要因であったと考えられるのである。これによって両者が結びつく理由を以下に二つ示すことにする。

その一つは仏教思想である。

梁啓超が、「過渡時代論」を著した翌年（光緒二十八年）に「論佛教與群治之關係」を書き、仏教を宣揚していることを考慮すれば、彼が「過渡時代論」の稿を成した時点で、仏教思想から離れたスタンスで〝此岸〟〝彼岸〟について言及したとは考え難い。仏教で言う〝彼岸〟とは、煩悩を去って、悟りをひらいた涅槃の境地のことであるから、〝此岸（現世）〟から〝彼岸〟に到達するということは、とりもなおさず梁啓超の言う「進化」（進歩し、発展すること）に結びつくではないか。

もう一つの理由は、近代資本主義国が、海洋を越えて存在していたことにある。激動の十八、十九世紀に、他国と通商関係を結び、海外に植民地を獲得した西洋諸国家が、中国の目標であったことは言うまでもない。近代化の青写真は、そうした国々の歴史そのものの中にある、とする梁啓超の考え方に鑑みれば、「〝彼岸〟の西洋」の高度なレベルに「〝此岸〟の中国」が到達することは、まさに梁啓超の考える「進化」そのものであったといえよう。

種を明かせば、右の二つのことは梁啓超自身によって言明されているのだ。光緒二十八年（「過渡時代論」の書かれた翌年）、梁啓超は自ら創刊した《新民叢報》の第一号に、「二十世紀太平洋歌」を発表し、中で次のように歌った。

亜洲大陸有一士　自名任公其姓梁　……　誓將適彼世界共和政體之祖國　問政求學觀其光
乃於西暦一千八百九十九年臘月晦日之夜半　扁舟横渡太平洋　……
其時彼士兀然坐　澄心攝慮游宵茫　正住華厳法界第三觀　帝網深處無數鏡影涵其旁 A
驀然忽想今夕何夕地何地　乃是新舊二世紀之界線　東西兩半球之中央 B
不自我先不我後　置身世界第一關鍵之津梁 C　……

傍線C（私の先でもなく後でもない　ちょうど我が身は世界で最も重要な津梁のただ中に在る）の部分から、この歌と「過渡時代論」との相関関係は明白であると言えよう。右の「二十世紀太平洋歌」こそ、梁啓超が「過渡時代論」を著すに至った動機の詠み込まれた作品なのである。そのことを踏まえて傍線A、Bの部分を見ると、傍線Aの内容（その時彼の士はじっと端座し　心を澄ませて思いを渺茫の間に遊ばせ　まさに華厳法界に於ける第三番目の観法である〝周遍含容観〟の境地にいた　天網の深奥にある無数の鏡はこの世の全てを映し出している）は先に述べた第一の理由（仏教に言う〝此岸〟を意識していたこと）に、傍線Bの内容（すなわち現在とは新旧二世紀のちょうど分かれ目にあたり　この地は東西両半球の真ん中にあたる）は第二の理由（近代西洋諸国が中国の〝彼岸〟であったこと）に、それぞれまさに合致していると分かる。

以上の検討を通じて「進化」と「過渡」が結びつけられた理由は明らかにされたと考える。つまり、「此岸」から「彼岸」へと渡ることを意味する「過渡」という言葉は、今示した二つの理由から、梁啓超をして「進化」の貌を想起させ、比喩として用いられることと相成ったのであろう。

では、「過渡」という比喩が用いられたのは、「進化」すなわち「旧から新へと向かうにつれて〝劣〟から〝優〟へと進歩すること」という概念を表すためだけであったのだろうか。思うに、それだけではなかったであろう。「過渡時代論」は全文を通じて、内容的にも口調的にも、客観的、学術的というよりはむしろ非常に感情的で、扇動的な調子を濃厚に帯びているが、その理由を推測するに、そもそも「過渡時代論」が、当時大いに流行していた「天演論（進化論）」と、梁啓超がちょうどその頃《清議報》上で盛んに宣伝していた「時勢造英雄論（時勢が英雄を造るの論）」とを〝ドッキング〟させるために書かれた論説であったからではなかろうか（＊清末、梁啓超によって宣伝された「時勢造英雄 ― 時勢が英雄を造る ―」のスローガンについては、拙稿「『經國美談』論 ― 政治小説の〝伝播〟に伴う変容について ―」《九州中国学会報》第三十一巻　平成五年五月を参照されたい）。

梁啓超の口調がいよいよ熱を帯びるのはその第六章に至ってからだ。それは、第六章の「過渡時代之人物與其必要之徳性」の内容が、「時勢造英雄論」の鼓舞する所であった「英雄」の必要性を、「過渡」の語を使用しつつ「天演（進化）の公理」の中に定めようと試みる、梁啓超にとっては核心の部分であった為であろう。従って「過渡時

代論」に於ける第六章の比重は、文章への熱の入り方にしても、文章そのものの長さにしても、全六章中突出している（参考として、六章全ての字数を示しておく。第一章；２１５字 第二章；２３０字 第三章；１９０字 第四章；３６８字 第五章；６４８字 第六章；１１６６字……第六章の字数は全体の約４１％を占める）。

この「時勢造英雄」論の存在が、「過渡」の語を比喩として用いたことと、深く関わっていたのではあるまいか。「時勢造英雄」論に言うところの「時勢」とは危機、あるいは混乱期を指すのであるが、彼の持論によれば、「国家が窮地にある時こそが英雄の生まれる時であり、英雄の生まれる時こそが国家の強大になる時である」から、国家が断崖絶壁に追い詰められていた清末とはまさに〝（進化の公理に従って）英雄の生まれて然るべき〟時代であったはずだ。よって彼は「過渡時代論」でもって、世の英雄たちにその登場を呼びかけたのだと考えられるであろう。「過渡時代論」が「時勢造英雄」論と「天演論」の爲に著されたものである限り、「過渡時代論」に於いて「進化すること」を表現する言葉は「危機的情況を経験しつつ、進化してゆく様子」を表現し得る言葉でなければならない。そこで、「過渡」の喩にスポットがあてられたのではないか。なぜなら、「過渡」とは、航海の危険を犯すことに他ならないからである。

当時の「過渡」は、国家間の交流であるから、大海を渡らねばならない。その行為の裏に、常に「危険」が存在したことは言うまでもない。実際に、梁啓超は当時の中国の不安定性を「今日中國之現状　實如駕一扁舟　初離海岸線　而放於中流　即俗語所謂　兩頭不到岸之時也（「過渡時代論」第五章）」という喩で表現している。

波間に何の保障も無く漂う長い時間と瞬時に訪れる危険――そうした、航海時の不安なイメージを、「過渡」という語は内包する。こうした理由からも、「過渡」の語は梁啓超によって、「進化」の貌を喩える適当な語として、数多の語彙の中から特に選ばれて使用されたのではあるまいか。

当章のまとめとして、先に呈した〝「過渡」の意味の変遷の謎〟に対する、筆者なりの解答を提出してみたい。「過渡」という言葉は元来〝此岸〟から〝彼岸〟に船で渡り行くことを意味するが、清末知識人、梁啓超は〝彼岸〟に対して二つのイメージを見出した。一つは仏教に於ける「悟りの境地、涅槃」というイメージ、もう一つは

海洋の彼方に存在する当時の「先進西洋諸国」というイメージである。つまり彼は、〝此岸〟に満ちる旧世界の「現実」に対して、〝彼岸〟には、洋々と広がる新世界の「理想」を思い描いていたものと考えられる。

当時の中国を支配していた旧体制を打破して〝近代化〟を達成するべく、ジャーナリストであった彼は西洋の先進的思想を次々に雑誌の上で宣伝したが、「進化論」はまさに典型的なその一つの例であった。「進化」即ち「（旧から新へ向かうにつれて）次第に発展すること」という概念を《清議報》を通じて伝播し、定着させるにあたって、彼は、「理想にむかって前進する様子」を、読者が感覚的に理解し得るよう〝比喩〟を用いて表現した。それが新漢語の「過渡」であったのだ。加えて「過渡」という語は、「進化」に伴う〝危険〟をも表現し得る語彙であるから、「時勢が英雄を造るの論」を唱える梁啓超にとっては、隠喩として用いるには格好の言葉であったに違いない。

梁啓超の比喩によって、「過渡」は「（旧から新へと）進化すること」の意味に広く用いられる言葉となった。その言葉が今もなお、今日の「過渡」として存在するのである。以上が筆者なりに纏めてみた解答である。

五

「過渡時代論」は、「天演論」が展開する「進化の公理」の中に、梁啓超が当時盛んに宣伝していた「時勢が英雄を造るの論」を組み込む、という目的の為に著された論文であった。従ってその内容とは、「進化の公理」に順って、新が旧にとって替わることの必然性を肯定し、新旧交替時期の動揺を是認した末に、その動揺を乗り切るべく、中国が現在「英雄の出現すべき時勢」に在ることを強調するものであった。それは見方を変えれば、当時の中国の〝脆弱さ〟を、天演論への位置付けによって〝当然〟と見做そうとする、言わば自己弁護であり、その自己弁護を「英雄を造る」ことによって自己肯定へと変えようとする、梁啓超の目論みの表出でもあった。旧時代と新時代との間にもうひとつ「過渡時代」をつくったのも、「清末の英雄の場所」を確保しようという、梁啓超の配慮に他ならなかったと考える。

梁啓超が「進化」という近代的な学術概念に絡めて「過渡」という〝比喩〟を用いたことは、本稿中で既に見てきたとおりであるが、その最終目的は「時勢の造りし英雄」を育て、奮起させることに存在した。西洋学問の移入に携わる立場にあった彼だが、その学問の内容や学問に対する姿勢は、今日的な目で見れば、客観的ではなく甚だ主観的で、理性的というよりはむしろ感情的で、非科学的であったとさえ言わざるを得ない。

しかし、それもまた「時勢」の要求するところであったのだろう。清末、「迷信打倒」が叫ばれ、科学の地位が飛躍的に向上しても、人々が根本的に求めるものは瞬時には変わらず、また、自分自身一清末人であった梁啓超が、「科学重視」を叫びながらも、自己の本質的な〝近代化〟を為し得なかったことは否定し難い事実である。トップジャーナリストとして常に時代や人々の要求に向き合った梁啓超の、それは〝限界〟とも言うべき、到達点（彼岸）だったのではあるまいか。

梁啓超の〝限界〟は、同時に変法自強運動の〝限界〟でもあったと考える。梁啓超が「過渡時代論」を《清議報》というマス・メディアに登載した、その行為自体の目的を追求していくと、変法自強運動の弱点が見えてくるように思う。自己弁護から出発し自己肯定へと至る為に、表面上は近代的な科学思想を掲げた政治運動、それが変法自強運動の紛れもない一面だったのではあるまいか。

歴史の潮流の中で、結局、孫文等の革命運動が勢力を得て、変法自強運動の方は衰退の一途を辿った。そこに、自己弁護に端を発する変法自強運動には、中国という巨大な船舶を「過渡」させるだけの力量がない、という清末中国のシビアな判断を見出すことは不可能だろうか。変法自強運動の弱点の一端は「過渡時代論」の中にも露呈されている。それが、本稿に於ける考察を通じて筆者が得た結論である。

補註

（1）光緒二十五年（『飲冰室文集』巻四所収）

（2）大河内康憲「現代語の語彙」（『言語』中国文化叢書1　大修館書店　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編

昭和四二年十一月二十日／Ⅲ・文法論、第八節所収）三七八頁

（3）大槻文彦『新訂大言海』新訂版第四九版五八〇頁（冨山房　昭和五一年三月二十日）

（4）ことばの誕生と定着の概況を知る方法の一つとして「辞書の調査」が考えられる。筆者は明治、清末に出版された辞書類（主として英和・和英辞書、国語辞書）の記載中から、新漢語「過渡」の誕生と定着に関する手掛りを得ようとしたが、充分な成果は得られなかった。以下、調査の結果を少し書き留めておくことにする。

〈英和（英華）・和英（華英）辞書について〉

英和辞書と英華辞書については、“transition”の説明に「過渡」という語が用いてあるか否かを調査し、和英辞書と華英辞書については、「過渡」という見出し語があるかどうかを調査したのだが、結局、一九〇〇年～一九〇一年頃までに出版された英和（英華）・和英（華英）辞書に於いて「過渡」の語は使用されなかったようだということまでしか、突き止め得なかった（大正に入ると、大方の辞書がtransitionの訳語として「過渡」を用いているようだ）。次に示すのは、調査した英和（華）・和（華）英辞書のうちの、主要なものの書名と、その調査結果（「過渡」という語の有無）である。

※英和（英華）・和英（華英）辞書の調査には、九州大学筑紫文庫所蔵の辞書四十四種を使用したが、紙幅の都合上、表中にはうち十三種をあげるに止めた。また、ａｂｃの三冊については、鹿児島大学法文学部の三輪伸春先生より教えて頂いた調査結果を記載した。なお、三輪先生からは、他にも参考文献等に関する数多くの御教示や御指摘を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

〈国語辞書について〉

永井荷風の『冷笑』（明治四十二～三年）や、夏目漱石の『手紙』（明治四十四年）等の文学作品の中に「過渡期」という言葉の用例が見えるので、日本に於ける新漢語「過渡」の使用は、明治四十年代には定着していたことが知られる。そこで、それ以前に出された『言海』（大槻文彦編　明治二十二年～二十四年）、『日本大辭書』（山田美妙編　明治二十六年）、『日本大辭林』（物集高見編　明治二十七年）、

刊年	英和(華)・和(華)英辞書名	編纂者、訳者	出版社(者)	有	無
光緒5	『華英字典』	(メドハースト本を底本とする)	申報館		○
M15	『英和字彙』(増補訂正一)	柴田昌吉、子安峻			○
M18	『英和対訳大字彙』	ウェブストル(ノア)著、前田元敏訳	大阪同志出版		○
M19	『和英語林集成』(改正増補第三版)	J・O・ヘボン	鹿田静七		○
M22	a『ウェッブスター氏新刊大辞書和訳字彙』	イーストレイキ編、棚橋一郎訳	三省堂		○
	『英華和訳字典/I—Z』	津田仙等訳、中村正直校	山内輹		○
M32	『和訳英字彙』	島田豊訳	大倉書店		○
M33	『英和双解熟語大辞彙』(再版)	増田藤之助	英学新誌社		○
	『増訂英華字典』	W・ロブシャイド編・井上哲次郎増補	善鄰訳書館		○
M35	『双解英和大辞典』(増訂第十三版)	島田豊	共益商社		○
	『和英大辞典』(第八版)	F・ブリンクリー、南條文雄、岩崎行親	三省堂		○
M44	b『模範英和辞典』	神田乃武	三省堂	○	
民国3	『英華大辞典』(第六版)	顔恵慶等	商務印書館	○	
T4	『井上英和大辞典』	井上十吉	至誠堂	○	
	『熟語本位英和中辞典』	斎藤秀三郎	日英社	○	
T8	c『AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF THE SPOKEN LANGUAGE』(第四版)	アーネスト・サトウ、イシバシマサカタ	三省堂	○	

M：明治　T：大正

『日本大辭典』（大和田建樹編　明治二十九年）、『帝国大辭典』（藤井乙男・草野清民共編　明治二十九年）、『ことばの泉』（落合直文編　明治三十一年）等の辞書について、初版本から、以後訂正増補を繰り返す過程を、私見の及ぶ限り通時的に調査してみた。その結果、最も早く「過渡」の語を取り上げたのは『ことばの泉』であり、明治四十一年に『大増訂　ことばの泉』へと成長した時点で「過渡」の語を収録したことがわかった。「過渡」は別冊の『補遺』中に見える（『言海』は明治四十四年に最初の改版が出された時点でもまだ「過渡」の語を収録していない）。この結果から筆者は、日本に於ける新漢語「過渡」の一般的な使用は、早くとも明治三十年代あたりから始まったのではないかと推測している。

（5）『説文解字』二篇下に「度也」とあり、度越・通過することをいう。

（6）『説文解字』二篇上に「濟也」とあり、水を渡ることをいう。(5)(6)は白川静博士の説明に拠る。『字統』平凡社　一九八四年八月）

（7）光緒二十八年（『飲冰室文集』巻十二所収）

（8）光緒二十八年（『飲冰室文集』巻十三所収）

＊　主要参考文献

- 中村忠行「中國文藝に及ぼせる日本文藝の影響」（《臺大文學》七四・七六・八二・八四・八五号　一九四二～一九四四年所収）
- さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版　一九六〇年三月）
- 彭澤周『中国の近代化と明治維新』（東洋史研究叢刊之二九　同朋舎　昭和五一年）
- 『講座進化②　進化思想と社会』（柴谷篤弘等編　東京大学出版会　一九九一年九月）
- シュウォルツ『中国の近代化と知識人』（平野健一郎訳　東京大学出版会　一九七八年四月）
- 森岡健二『語彙の形成』第四章「開化期翻訳書の語彙」（現代語研究シリーズ第一巻　明治書院　昭和六二年六月）

「過渡時代論」に見る梁啓超の〝過渡〟観（若杉）

中国文学論集　第二十二号
●鈴木修次『文明のことば』（文化評論出版　昭和五六年三月）
●大河内康憲「現代語の語彙」（中国文化叢書1『言語』　大修館書店　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　昭和四二年十一月／Ⅲ・文法論、第八節所収）
●柳父章『翻訳の思想』（平凡社　昭和五二年）
●『近代の語彙』（講座日本語の語彙第六巻　明治書院　佐藤喜代治編　昭和五七年二月）
●見坊豪紀「日本語の辞書(2)」（岩波講座日本語9『語彙と意味』　岩波書店　一九七七年六月）

＊底本

●《清議報》第八十三冊（本稿では臺灣成文出版社より民国五六年に影印刊行された覆製本を使用した。）